EU-日本学講義　　2008年11月18日　　担当：菅原慶乃

地域研究の視点について――国民文化論のイデオロギーと映画

＜　Ｉ　西洋から見られる他者としての日本＞

１　ジャパニメーション・ブームのイデオロギー

1-1　毛利嘉孝(1996)

・二つの問い；「日本のアニメーションがジャパニメーションと呼ばれ世界を席巻しているといわれるのはなぜか？」、「日本のアニメーションがジャパニメーションと呼ばれ世界を席巻しているのはなぜか？」

・1990 年代中盤、「アニメが日本文化の主要な輸出産業になるのではないか」という漠然とした期待と不安」

・『ＡＫＩＲＡ』に集約されるジャパニメーションのイメージ

【映像】『AKIRA』（大友克洋、1988）

1-2　上野俊哉(1996)

・ジャパニメーション的表象の政治性を指摘

・無国籍性/物語装置としての「閉ざされた空間」/モビルスーツ/サイボーグ等

→「日本」という名のスーツ＝身体とそれへの執着

・　テクノ・オリエンタリズム

・エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(1978)との関わり

> オリエンタリズム
> 　数世代にわたる西洋の作家や芸術家、行政官たちが生産してきた、 東洋と東洋的なものをエキゾチックで怠惰で、奇怪で信用できないもの として描く神話やステレオタイプ
> （ピーター・ブルッカー、『文化批評用語集；　カルチュラル・スタディーズ＋』、新曜社

・他者の「不在」を前提

・テクノ・オリエンタリズム=高度なテクノロジーを掌握した冷淡な日本イメージの強調

(Morley and Robins(1995)

【映像】『ブレード・ランナー』（リドリー・スコット、1982）

> The association of technology and Japaneseness now serves to reinforce the image of a culture that is cold, impersonal and machine-like, an authoritarian culture lacking emotional connection to the rest of the world,The otaku generation-- kids 'lost to everyday life' by their immersion in computer reality--provides a good symbol of this. (中略)　These kids are imagined as people mutating into machines; they represent a kind of cybernetic mode of being for the future. This creates the image of the Japanese as inhuman.
> （中略）
> Within the political and cultural unconscious of the West, Japan has come to exist as the figure of empty and dehumanised technological progress. This provokes both resentment and enby The japanese are

> オリエンタリズムやクセノフォビアの基本は、一種の文化的“自惚れ”を通じて異文化、別地域の他者を劣位に おくことであった。文明と野蛮、近代と前近代といった二項対立が、西欧と非西欧の地勢的配置に当社され、そこに諸々の ステロタイプが生まれる。劣位の主体は時間的には過去に、つまりは遅れた者として投影される。　上野俊哉(1996)

・レイ・チョウの「ポストモダン自動人形」(『ディアスポラの知識人』)

→自動化され見せ物化される非抑圧者

→「ジャパン・バッシング」の影響

1-3　HENTAI について

・(公的) ジャパニメーション・ブームにおける少女性愛等との結びつきの無視

→「日本文化論」の新種としてのジャパニメーション言説

2　日本文化論のイデオロギー

2-1 大塚・大澤(2005)による反論

【資料①】『ジャパニメーションはなぜ敗れるか』(角川 ONE テーマ新書、2005)

2-2　イデオロギーとしての日本文化論について

(A) ハルミ・ベフ『イデオロギーとしての日本文化論』(思想の科学社、1997) による文化論の特徴

・自他の区別にかかわる特徴

(1) ある民族 (日本民族) を他の集団から区別する/(4)比較される他集団とは利害関係にある/(8)文化の特徴が誇張される/(13)文化論には自民族中心主義的傾向がある

・自文化の独自性/単一性等にかかわる特徴

(2)自己の集団をの文化的・社会的特徴を論じる/(3)その特徴は個別的なものである/(5)集団の特徴は単純化されている/(6)その特徴とは集団に共有される最大頻度の事項であったり、あるいは 頻度は少ないものの際だって個別的な価値を持つと思われるもの/(9)矛盾した特徴を持たない/(10)文化論の特徴は、あたかも民族全体に当てはまるかのように論じられる/(11)均質性、同質性、単一性の前提

・その他の特徴　　(7)その特徴とは伝統的なものが多い/(12)文化論は価値判断を伴う

(B) 西川長夫 『国境の越え方－国民国家論序説』(初版新曜社、1992)【資料②、③】

・日本文化論・日本人論の「欧化」と「回帰」

・日本文化論の「回帰」について

これらの例が示すこと；客観的な文化要素の研究というよりも、 文化要素の研究で以て民族・文化の特異性を強調することで、近代国民国家 における国民統合のイデオロギー装置として機能している

2-3　国家のイデオロギー装置 (アルチュセール) としての国民文化

学校装置/ 家族装置/ 宗教装置/ 政治装置/ 組合装置/ 情報装置/ 出版-放送装置/ 文化装置

現実化される支配者のイデオロギー→ナショナリズム、自由主義、経済主義、ヒューマニズム…

3　国民の記憶装置としての映画

3-1　国民概念の成立について

・三つの共有＝近代的時間と近代的空間の共有 (Anderson, 1983) / 視線の共有

・国民 (Nation)、ナショナリズムのパラドクス (古さ・伝統への固執/固有性/理論的貧困

・「国民とは〔イメージとして心の中に〕想像されたものである。というのは、いかに小さな国民であろうと、 これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ることも、会うことも、あるいはかれらについて 聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の正餐(コミュニオン)のイメージが生きているからである。」

アンダーソン翻訳書(1987), p.17　　→「無名戦士の墓」

3-2　共有される時間について

・近代の時間＝時計や暦によって垂直に流れる、計測可能な単位としての時間

・近代的時間を普及せしめたもの →小説と新聞という活字メディア

・語りの構造の確認

【資料④】　近代的小説の構造について（アンダーソン翻訳書より）

＜対比＞【映像資料】　D.W.グリフィス『国民の創生』(1915)の冒頭

3-3　共有される空間について

・出版資本主義の登場と出版後の普及（共時的、通時的な民族のテリトリーの拡大、言語の統一化（権威化）を引き起こす）

3-4　共有される視線について　その１見る側の視線

・近代的「視点」の確立（俯瞰 / 観察）

・映画という体験（身体の拘束を伴う経験）

・リュミエール兄弟『列車の到着』(1985)

・「継続する現在」

> Cinema is unique among the arts in its projection of time primarily as the continuous present, the immediate moment being both of utmost importance and the accumulation of all that has gone before. The popular novel, now overly influenced by cinema, approaches this preoccupation with the second- by- secong unfolding of events. The basic ongoing rhythm is the dominant characteristic, with variations in velocity and time tenses as secondary interruptions. Cinematic devices that uniquely affect pace and place, such as alterations in motion-speed (subjects in slow or fast motion, frame panning or traveling in slow or fast speeds, and

・　映画におけるリアリティの志向

・

【映像】D.W.グリフィス『国民の創生』(1915)

・平行モンタージュ / 偏在する時空間

・史実にもとづくことを強調する再現シーン

テッサ・モリス・スズキ『過去は死なない』(2004) p.155「こうした紛らわしいリアリズムの主張は “複製”がどの時点で解釈と虚構になるのか、 観客にはまったく手がかりを与えない」

・初期ドキュメンタリーの例

（11/25 の内容［予定］）

3-5　共有される視線について　その 2 見られる側の視線

＜　Ⅱ　アジアから見られる他者としての日本とアジアの自画像について＞

1　中国映画における日本人表象の変遷

2　考察：「台客」（台湾における土着的でクールなファッション）について

＜レジュメ内引用文献＞

毛利嘉孝(1996)　ジャパニメーションとジャパナイゼーション『ユリイカ』［1996.08］

上野俊哉(1996)　ジャパノイド・オートマトン--表徴の準帝国　『ユリイカ』［1996.08］

ベネディクト・アンダーソン（白石隆、白石さや訳）『想像の共同体 ： ナショナリズムの起源と流行』（リブロポート、1987）、原文: *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983.

Gessner(1968)　*The Moving Image: A Guide to Cinematic Literacy, London: Cassell.*

Morley and Robins(1996)　*Spaces of identity : Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*, London: Routledge.